

【 復活のトロパリ 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
 恵深主 爾高

くだり、みっかのほうむりをうけて、
 降三日葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、
 我等苦 釋給

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
 我生命復活主 光

えいはなんぢにきす。
 榮 爾 んぢに 歸 す。

【 衆聖人の主日のトロパリ 第4調 】

ハリストスかみよ、ぜんせかいにあるなん
 神 全世界 爾

ちがちめいしゃのちにてくれないのびふくのご
 致命者 血 紅 美服 紅 如

とくかざられたるなんぢのきょうかいはか
 飾 爾 教 會 い は か 彼

れらをもつてなんぢによぶ、なんぢのたみにおん
 等 以 爾 呼 爾 民 恩

たくをくだあし、なんぢのすまいにへい
 澤 降 爾 住所 平

あんをあたえ、われらのたましいにおおい
 安 與 我 等 靈 大

なる あわれみを たれたま え
憐 垂 給

【 衆聖人の主日のコンダク 第8調 】

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 。 い 今
光 榮 父 子 聖 神 歸

ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
何 時 世 世

しゅよ、ぜんせかい は ほ う し ん な る ち め い し ゃ を 、
主 全 世 界 捧 神 致 命 者

ばんぶつのはつものとして、なんぢばんぶつを
萬物 初 實 爾 萬物

う え つ け し も の に た て ま つ る 、 だ い じ ん じ
植 附 者 奉 大 仁 慈

なるものよ、かれらおよびしょうしんぢよのき
者 よ 彼 等 及 生 神 女 祈

と う に よ り て 、 なん ぢ の す ま い な る なん ぢ の
禱 依 爾 住 所 爾

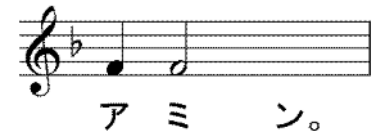
きょうか い を ふ か き へ い あ ん に ま も り た ま
教 會 い を 深 平 安 守 給

え。

司祭) (黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と

ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しよせいじん きとう よ
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
 蓋 我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 歸 今 何 時 世 世
 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第8調、諸聖人の提綱第4調 】

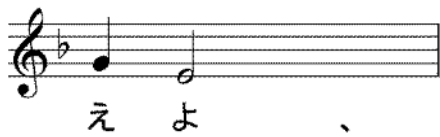
司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

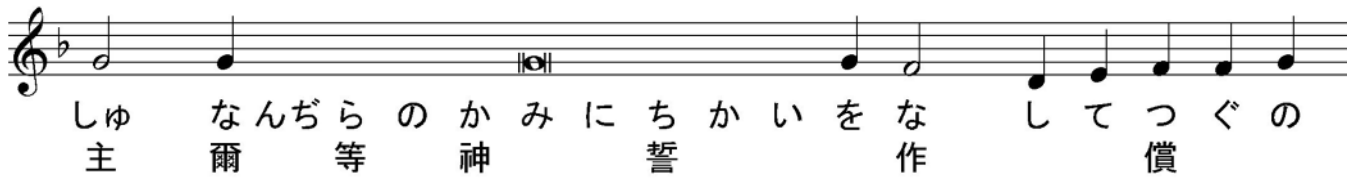
司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

し ゅ な ん ぢ ら の か み に ち か い を な し て つ ぐ の
 主 爾 等 神 誓 作 償



誦經) ^{かみ}神は^しイウデヤに^{そのな}知られ、^{おお}其名は^いイズライリに^{なり}大なり、



誦經) ^{かみ}神よ、^{なんぢ なんぢ}爾は^{せいしょ}爾の^{おい おごそか}聖所に^{なり}於て^{なり}嚴なり、



【 ^{アポストロス}使徒經 330端 エウレイ書11章33節~12章2節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒^{じん たつ}パヴェルが^{しよ よみ}エウレイ人に^{なり}達する^{なり}書の^{なり}讀、

司祭) ^{つつし}謹^きみて^{なり}聽く^{なり}べし、

誦經) ^{けいてい}兄弟よ、^{しゅうせいじん}衆^{しん}聖人は^よ信に^{しよこく}由りて^{したが}諸國を^ぎ從^{おこな}え、^{きよやく}義を行^うい、^{しし}許約を受け、^{くち}獅の^{ふさ}口を^{なり}箝
^ひぎ、^{いきおい}火の^け勢を^{つるぎ}滅し、^は劔の^さ刃を^{よわ}避け、^{つよ}弱きよりして^{たたかい}強くせられ、^{いさ}戰に^{いほう}勇み、^{ぐん}異邦の^{なり}軍を
^{ついや}潰せり、^{おんな}婦は^{そのししや}其死者を^{ふかつ}復活せし^{もの}者として^う受けたり、^{またあるもの}亦或者は^{さら}更に^よ善き^{ふかつ}復活を^え得ん^{ため}爲
^{まぬか}に、^{ほつ}免るるを^{むご}欲せずして、^{ころ}酷く^た戮されたり、^{もの}他の^{あざけり}者は^{むち}嘲弄と^{またなわめ}鞭扑と、^{ひとや}又^{なり}縲紲と^{なり}圜圖との
^{こころみ}試を受け、^う石にて^{いし}撃たれ、^う鋸にて^{のこぎり}解かれ、^ひ拷問に^{ごうもん}遇わせられ、^あ刃にて^{やいば}殺され、^{ころ}綿羊
^{さんよう}と^{かわ}山羊との^き皮を^{るろう}衣て^{きゅうぼう}流離し、^{かんなん}窮乏、^{しんく}患難、^{しの}辛苦を^{せかい}忍び、^お世界に^た置くに^{もの}堪えざる^{ころ}者は、^{こう}曠
^や野、^{さんれい}山嶺、^{がんけつ}巖穴、^{ちくつ}地窟に^{さまよ}徨えり、^{これらみなしん}此等皆^よ信に^{しょう}由りて^{なり}證せられたれども、^{きよやく}許約せられ

ところ え けだしかみ われら こと おい さら よ こと よけん かれら われら とも
 し 所 を獲ざりき、蓋 神は我等の事に於て更に善き事を預見せり、彼等は我等と偕に
 まつた え ため ゆえ われら しょうしゃ か くも ごと おお かこ
 せずしては 全 ぎを得ざらん爲なり。故に我等も 證 者の斯く雲の如く衆きに圍まれて、
 およそ おもに われら はば つみ さ にんたい もつ われら まえ あ はせば はし われら
 凡 の重負と我等を阻む罪とを去り、忍耐を以て、我等の前に在る馳場を趨りて、我等
 しん かしら およ せいぜんしゃ あお のぞ
 の信の首、及び成全者イイスを仰ぎ望むべし。

(比較用 口語訳) 彼らは信仰によって、国々を征服し、義を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた。女たちは、その死者たちをよみがえらせてもらった。ほかの者は、更にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しぼり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、(この世は彼らの住む所ではなかった)、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた。さて、これらの人々はみな、信仰によってあかしされたが、約束のものは受けなかった。神はわたしたちのために、さらに良いものをあらかじめ備えて下さっているので、わたしたちをほかにしては彼らが全うされることはない。こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイイスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。

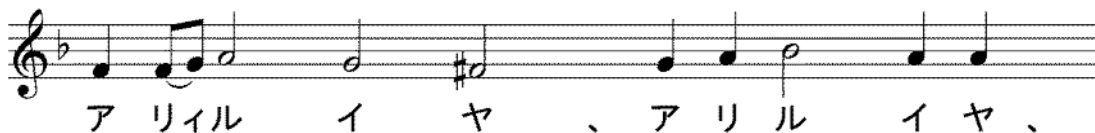
【 アリルイヤ 衆聖人の主日第4調 】

司祭) なんぢ へいあん
爾に平安、

誦經) なんぢ しん
爾の神にも、

司祭) えいち
睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ぎじん よ しゅ これ き
義人は呼ぶに、主は之を聴く、



誦經) 義人ぎじんには憂うれい多おほし、然しかれども主しゅは之これを悉ことごとく免まぬかれしめん、



司祭) (黙誦：人ひとを愛あいする主しゅ宰さいよ、我わが心こころに神かみを知しる智ち慧えいの淨いさぎよき光ひかりを輝かがかし、我わが思し

念ねんの目めを啓ひらきて、爾なんぢが福ふく音いんの教おしえを悟さとらしめ給たまえ、我わが衷うちに爾なんぢの福ふくたる誠いましめ

を畏おそるる畏おそれをも入いれて、我われら等ことごとが悉にくたいくよくの肉ふ體およの慾なんぢを踏よるみ、凡よるそ爾なんぢの喜よろこぶ

所ところを思おもい且かつ行おこないて、屬ぞく神しんの生せい活かつを過すぐるを致いたさせ給たまえ、蓋けだしハリスかみトス神かみ

よ、爾なんぢは我わが靈たましいと體からだとの光こう照しょうなり、我われら等なんぢ爾なんぢと爾むげんの無ちち原しせいの父しと至せい聖せい至せい

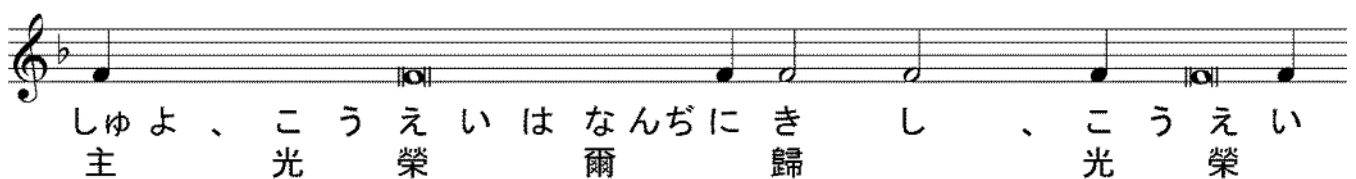
善ぜんにして生いのち命ほどを施なんぢす爾しんの神こうえいとに光けん榮いまを獻いつず、今よよも何なん時なんも世よよ世よよに、アミン。)

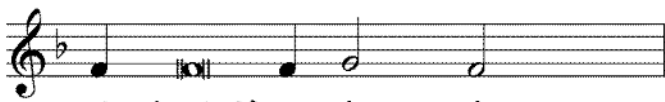
【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書 38 端 10 章 32、33、37、38、19 章 27～30 節 】

司祭) 睿えい智ち、肅つつしみて立たて聖せい福ふく音いん經けいを聴きくべし、衆しゅう人うじんに平へい安あん、



司祭) マトフェイ傳でんの聖せい福ふく音いん經けいの讀よみ、

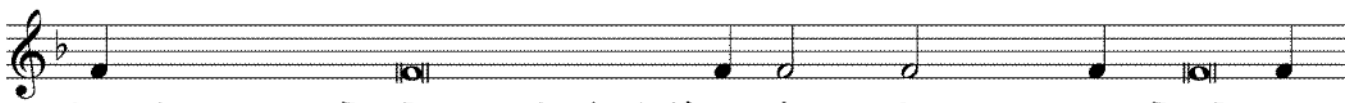




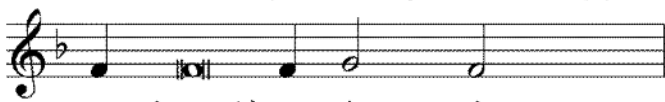
は なんぢに き す 。
爾 歸

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、^{しゅ} 主 ^{そのもと} は其 ^い 門徒に謂えり、^{およ} 凡 ^{われ} そ我 ^{ひと} を人 ^{まえ} の前 ^{みと} に認 ^{もの} めん者 ^{われ} は、我 ^{また} も亦 ^{かれ} 彼 ^{てん} を天 ^{いま} に在 ^わ す我 ^{ちち} が父 ^{まえ} の前 ^{みと} に認 ^{われ} めん。我 ^{ひと} を人 ^{まえ} の前 ^い に諱 ^{もの} まん者 ^{われ} は、我 ^{また} も亦 ^{かれ} 彼 ^{てん} を天 ^{いま} に在 ^わ す我 ^{ちち} が父 ^{まえ} の前 ^{みと} に諱 ^{われ} まん。父 ^{ちち} 或 ^{あるい} は母 ^{はは} を愛 ^{あい} すること我 ^{われ} に過 ^す ぐる者 ^{もの} は、我 ^{われ} に宜 ^{よろ} しからず、子 ^こ 或 ^{あるい} は女 ^{むすめ} を愛 ^{あい} すること我 ^{われ} に過 ^す ぐる者 ^{もの} は、我 ^{われ} に宜 ^{よろ} しからず。己 ^{おのれ} の十 ^{じゅう} 字 ^{じか} 架 ^か を負 ^お いて我 ^{われ} に従 ^{したが} わざる者 ^{もの} は、我 ^{われ} に宜 ^{よろ} しからず。其 ^{その} 時 ^{とき} ペトル ^{こた} 答 ^{かれ} えて彼 ^い に謂 ^み えり、視 ^{われ} よ、我 ^{われ} 等 ^ら 一 ^い 切 ^っ を舍 ^す てて、爾 ^{なんぢ} に従 ^{したが} えり、然 ^{しか} らば我 ^{われ} 等 ^ら 何 ^{なに} を得 ^え んか。イイス ^{かれ} 等 ^ら に謂 ^い えり、誠 ^{まこと} に爾 ^{なんぢ} 等 ^ら に語 ^つ ぐ、爾 ^{なんぢ} 等 ^ら 我 ^{われ} に従 ^{したが} える者 ^{もの} は、復 ^{ふく} 生 ^{せい} の時 ^{とき} 、人 ^{ひと} の子 ^こ が其 ^{その} 光 ^{こう} 榮 ^{えい} の位 ^{くらい} に坐 ^ざ するに及 ^{およ} びて、亦 ^{また} 十 ^{じゅう} 二 ^に の位 ^{くらい} に坐 ^ざ して、イズライ ^{じゅう} リの十 ^に 二 ^に 支 ^し 派 ^は を審 ^{しん} 判 ^{ぱん} せん。凡 ^{およ} そ我 ^わ が名 ^な の爲 ^{ため} に家 ^{いえ} 、或 ^{あるい} は兄 ^{きょう} 弟 ^{だい} 、或 ^{あるい} は姉 ^し 妹 ^{まい} 、或 ^{あるい} は父 ^{ちち} 、或 ^{あるい} は母 ^{はは} 、或 ^{あるい} は妻 ^{つま} 、或 ^{あるい} は子 ^こ 、或 ^{あるい} は田 ^た 疇 ^{はた} を舍 ^す つる者 ^{もの} は、百 ^{ひゃく} 倍 ^{ばい} を受 ^う け且 ^{かつ} 永 ^{えい} 遠 ^{えん} の生 ^い 命 ^ち を嗣 ^い がん。惟 ^{ただ} 多 ^{おお} く先 ^{さき} なる者 ^{もの} は後 ^{あと} になり、後 ^{あと} なる者 ^{もの} は先 ^{さき} にならん。

(比較用 口語訳) 人の前でわたしを受け入れる者を、わたしもまた、天にいますわたしの父の前で受け入れるであろう。しかし、人の前でわたしを拒む者を、わたしも天にいますわたしの父の前で拒むであろう。わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。そのとき、ペテロがイエスに答えて言った、「ごらん下さい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従いました。ついては、何がいただけるのでしょうか」。イエスは彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。世が改まって、人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従ってきたあなたがたもまた、十二の位に座してイスラエルの十二の部族をさばくであろう。おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであろう。しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮



は なんぢに き す 。
爾 歸